

『サロベツの最大のガンカモ中継地ペンケ沼調査報告会』

令和3年12月18日（土）15：00-16：30（オンライン+会場）

講演

15:05-15:30 国内34箇所目のフライウェイネットワークサイト参加登録を祝して～
東アジア-オーストラリア地域フライウェイパートナーシップとは～

安田 美香（バードライフ・インターナショナル東京）

15:30-16:10 ペンケ沼におけるガンカモ類と保全上の課題

長谷部 真（サロベツ・エコ・ネットワーク）

16:10-16:30 ペンケ沼に流入するゴミ

嘉藤 慎（サロベツ・エコ・ネットワーク）

会場：定住支援センターふらっときた

北海道天塩郡豊富町豊富東1条6丁目

主催：NPO 法人サロベツ・エコ・ネットワーク

協力：一般社団法人バードライフ・インターナショナル東京

日本野鳥の会道北支部

後援：豊富町

講演要旨

「国内34箇所目のフライウェイ・ネットワークへの参加登録を祝して
～東アジア・オーストラリア地域フライウェイ・パートナーシップとは」

安田美香(バードライフ・インターナショナル東京)



バードライフ・インターナショナル東京は、2020年よりPCPD(パシフィック・センチュリー・プレミアム・ディベロップメント)より支援を受け、北海道内の既存のフライウェイ・ネットワークサイトや新しく参加を考えている湿地の活動を支援しています。その中で、サロベツ湿原のペンケ沼における渡り性水鳥の調査や普及活動も支援してきました。

この度、2021年10月25日に、豊富町やサロベツ・エコネットワークの皆さんの努力により、151番目(国内では34番目)のネットワーク参加地として、サロベツ湿原が登録されました。ここは、マガンやオオヒシクイの東アジア個体群の個体数の1%以上が定期的に飛来し、また、それらの種を含めて2万羽以上の渡り性水鳥が定期的に飛来していることから、参加のための基準を満たしていると認められたためです。

本講演では、豊富町にお住まいの皆さんを初め、本日までご参加頂いている方々に、東アジア・オーストラリア地域フライウェイ・パートナーシップ(EAAFP)についての理解を深めて頂くことを目的に、以下についてご説明したいと思います。

1. 多くの渡り性水鳥が飛来するサロベツ湿原を含む、東アジア・オーストラリア地域フライウェイ(EAAF)の特徴
2. EAAFPについて
3. 国内のネットワーク参加地や活動について

ペンケ沼におけるガンカモ類と保全上の課題

長谷部真（NPO 法人サロベツ・エコ・ネットワーク）

北海道北部にあるサロベツ湿原は国立公園とラムサール条約登録湿地に指定されています。2021年10月25日に東アジア太平洋フライウェイパートナーシップ(ガンカモ類)にサロベツ湿原(2253ha、豊富町)が登録されました。登録された地域はラムサール条約登録湿地の北半分です。今回入らなかった幌延町の南半分は登録に向けて今後活動を続けて行きます。

サロベツ湿原周辺には大きく分けて4つ(大沼:稚内市、兜沼:豊富町、ペンケ沼:豊富町・幌延町、振老沼:天塩町)のガンカモ類の主要な渡りの中継地があります。春と秋にはマガン、ヒシクイ、コハクチョウ、オオハクチョウを中心としたガン・ハクチョウ類が利用し、近年はカリガネ、ハクガン、シジュウカラガンなどが確認されるようになっていきます。これらの中でもペンケ沼が最大の中継地で多いときでオオヒシクイが5,000羽、マガンが40,000羽訪れます。

もともとペンケ沼に流入する大きな河川はありませんでしたが、下エベコロベツ川(1926年)と福永川(1968年)が人工的に接続され、流入河川の流域面積が16倍になり、沼に土砂が堆積するようになりました。その結果沼の面積が1926年の2.5km²から2021年の1.1km²に減少し、沼が2つに分断され、その間が樹林化しています。このままでは将来ペンケ沼は土砂により埋没し、道北地方の主要なガンカモ類の中継地が失われる恐れがあります。

私たちはバードライフインターナショナル東京(PCPD)から支援を受け、ペンケ沼の保全に向けてガンカモ調査、湖面積調査、水深調査を実施しました。その結果、ペンケ沼の下エベコロベツ川流入部付周辺にはヘドロが堆積し、2021年9月と11月には12箇所(平均水深が20cm以下となり、部分的な沼が干上りや湿地化、草地化が見受けられました。また、2005年の国土地理院の地形図と比較して上記河川の河口部の先端が南に350m伸び、南岸まで120mの距離になりました。このままでは近い将来にペンケ沼は3つに分断される恐れがあります。

ペンケ沼の現状は過去に上サロベツ自然再生協議会の議題に挙げられたこともありましたが、これまでのところ具体的な対策が検討されていません。豊富町は過去の河川の氾濫を克服し、開拓による湿原の牧草地化によって発展してきた歴史があるので、酪農との共存という面で難しい部分も多々あるかと思えます。ただ雪解け水による春の河川の氾濫と牧草地の冠水によって生み出される景観は比類のないもので、上流からの栄養分の供給をもたらす、ガンカモ類にとっての憩いの場を提供しています。この土砂流入問題の有効な解決策が見当たらない状況ですが、河川切替された下エベコロベツ川をサロベツ川に接続し元の河道に戻すことがガンカモ類の中継地であるペンケ沼の消失を回避するための唯一の根本的な解決方法になるかもしれません。

ペンケ沼に流入するゴミと湖沼調査報告 嘉藤 慎(NPO 法人サロベツ・エコ・ネットワーク)

〇はじめに

今回、調査を行ったペンケ沼は、サロベツ湿原内でも多くの水鳥が渡りの中継地として使用する重要な沼です。しかし、このペンケ沼に接続されている下エベコロベツ川などから流れてきたと考えられるゴミが大量にあり、この沼を利用する動物たちへの悪影響(誤飲など)や景観を損ねるといった影響が考えられ、国立公園として望ましい状態ではありません。

この問題を解決するために環境省の事業で2009年～2012年及び2015年にペンケ沼内のゴミ清掃を行いました。しかし、ゴミが減ることがなく次々と新しいゴミが見つかるという状況が続きました。その後、2020年から「北海道におけるフライウェイ・サイトの保護活動支援」の助成を受け、改めて対策を講じるために沼の周辺でのゴミ清掃と接続する河川のゴミの調査を行いました。

〇方法

ペンケ沼周辺のゴミ清掃を2020年9月及び2021年10月に各一回ずつ実施しました。河川におけるゴミの調査は、2021年10月から12月にかけて実施しました。調査を行ったのは、福永川の雁橋～福永橋までの約1.5kmの範囲と下エベコロベツ川及びその支流のオンネベツ川の主要な橋などの前後約50mの範囲を対象として、範囲内の河川又は河川敷を踏査して投棄されているゴミの調査を行いました。

〇まとめ

ペンケ沼では広範囲のゴミ清掃は実施しませんでした。2020年は50kg、2021年は25kgのゴミを回収することができました。回収したゴミには瓶や缶、ペットボトルの他、農業資材や漁業用の浮きも見つかりました。

河川でのゴミ調査では、福永川は約20kgのゴミを回収することができました。河川の上流側では農業資材が多く、下流側の福永橋周辺では毛布やタイヤなどの大型のゴミの他にホタテの貝殻やビニール袋などの家庭ゴミも見つかりました。下エベコロベツ川及びオンネベツ川では、全10地点で調査を行い各地点で0.5～20.2kgのゴミを回収しました。回収したゴミの量は少ない地点と多い地点があり、少ない地点では比較的人目につき流速が早い地点だったことから、投棄されるゴミが少ないまたはすぐに流されていると考えられます。一方、ゴミが多い地点では人目につかない場所だったため、河川敷にも多くのゴミの投棄が見られました。この中には漁業で使用していたと推測される網もありました。回収したゴミの多くは農業用のビニール又はビール缶やペットボトル、コンビニ弁当の空き容器などの家庭ゴミでした。この中には比較的最近投棄されるゴミもありました。これらのことから、継続的に河川へゴミが投棄されており、これが大雨や春の雪解け水による増水によって流され、ペンケ沼に流れ着いていると予測されました。

ペンケ沼のゴミ問題を解決するためには、橋などから河川へ投棄されるゴミを減らす必要があると考えています。